日语“テイル”句型用法研究

曹倩◎著

華中科技大學出版社
http://www.hustp.com

日语“テイル”句型用法研究

曹倩◎著

華中科技大學出版社
http://www.hustp.com
中国·武汉

图书在版编目(CIP)数据

日语“テイル”句型用法研究/曹倩著.—武汉:华中科技大学出版社,2019.6
ISBN 978-7-5680-5278-8

Ⅰ.①日… Ⅱ.①曹… Ⅲ.①日语-句法-研究 Ⅳ.①H364.3

中国版本图书馆CIP数据核字(2019)第111018号

日语“テイル”句型用法研究　　曹倩　著

策划编辑:刘　平
责任编辑:刘　平　神田英敬
封面设计:刘　卉
责任校对:李　琴
责任监印:徐　露
出版发行:华中科技大学出版社(中国·武汉)　电话:(027)81321913
武汉市东湖新技术开发区华工科技园　邮编:430223
录　排:华中科技大学惠友文印中心
印　刷:北京虎彩文化传播有限公司
开　本:787mm×1092mm　1/16
印　张:9.25　插页:1
字　数:175千字
版　次:2019年6月第1版第1次印刷
定　价:48.00元

本书若有印装质量问题,请向出版社营销中心调换
全国免费服务热线:400-6679-118　竭诚为您服务
版权所有　侵权必究

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

本书由上海师范大学校级人文社会科学研究一般项目
（课题名称：日语「テイル形」及其汉译研究）资助
（课题经费编号：A-0230-17-001028）

前言

本书是在我撰写的博士论文基础之上，经上海师范大学校级人文社会科学研究一般项目（课题名称：日语「テイル形」及其汉译研究）资助，进一步深入研究而成的。

本书主要对日语“テイル”这一句型的全部用法进行了系统分析与整理。本书由绪论、本论（四章）以及结论三部分组成。本论第1章对“テイル”研究的发端和其后的发展进行了论述，并归纳整理了迄今为止前人研究中的几大主流分类观点。第2章聚焦于“テイル”的各种用法，在前人研究的基础上对各种用法进行了系统归纳。第3章主要针对表示“状态”的“テイル”的用法进行了探讨。这类用法与动词的关系非常密切，因此对相关动词进行了梳理和分类。第4章利用话语分析的研究方法对表示过去发生的事情的“テイル”进行了分析，对这类用法的本质进行了探讨。

对“テイル”这一句型用法的研究基于我的硕士论文。在日本读硕士期间，我主要针对“テイル”与“タことがある”这两个句型的用法进行了比较研究。随着研究的深入，我发现“テイル”在表示过去发生的事情时似乎还有更深层面有待探讨及研究，而且关于“テイル”用法的研究虽多，却缺少系统整理，因此在攻读博士学位期间我决定继续对“テイル”的用法进行研究。

在此，我要衷心感谢我的博士生导师——日本拓殖大学的石川守教授，可以说这项研究是在石川老师的精心指导下才得以顺利完成的。石川老师精益求精的工作作风和诚挚谦逊的品格激励着我在今后的教育及科研工作中不懈前行。

我还要感谢上海师范大学外国语学院的各位领导以及日语系的领导、同事对我的帮助和支持；同时，还要感谢华中科技大学出版社的刘平编辑。在他们的支持与帮助下，本书得以顺利与读者见面。

最后，要将这本书献给我的父母，感谢他们多年来对我生活、学业、工作的支持和鼓励，感谢他们给予我的爱与帮助。

由于学识浅薄，水平有限，书中定有纰漏、错误或不足之处，敬请学界专家、前辈以及广大读者不吝赐教。

曹倩

2018年12月于上海

目录

序論 1
1. 本書の研究背景 1
2. 本書の研究目的と研究方法 2
3. 本書の構成 2

第１章　先行研究 4
1.1　「テイル」に関する研究の発端とその後の流れ 4
1.2　「テイル」構文の用法の分類に関して 43

第２章　「テイル」の用法に関する分類 49
2.1　個々の用法のまとめ 49
2.2　「進行中の（動作・変化などの）動き」 52
2.3　「状態」 53
2.4　「長時間の継続・持続」 55
2.5　「繰り返し・習慣」 56
2.6　「経験」、「記録」、「過去の事実を回想」、「現在有効な過去の運動の実現」、「パーフェクト性」、「効力持続」･･･（立証のための情報提示） 60

第３章　「テイル」の「状態」の用法について 61
3.1　先行研究における「状態」の「テイル」の研究とその問題点 .. 61
3.2　「単純状態」の「テイル」について 62
3.3　「結果の状態」の「テイル」について 65
3.4　本書の「状態」の「テイル」のまとめ 79

第４章　「テイル」の新たな第５の用法――立証のための情報提示 82
4.1　先行研究 82
4.2　問題提起 90

4.3 「情報提示」について 92
4.4 「立証のための情報提示」の「テイル」 94

結論 127
1. 結論 127
2. 将来の展望 136

＜参考文献＞ 138

序論

1. 本書の研究背景

「テイル」の用法は、日本語学習者にとって最も習得困難な学習項目の一つである。初級の早い段階から習い始めるにもかかわらず、学習者は上級になっても、実際の使用場面で、多くの間違いを犯してしまう。この「テイル」の用法については、これまで多くの研究者により研究されてきたが、まだ多くの点で未解明の問題が残されている。

これまでに、「テイル」の分類についての研究は盛んに行われてきたが、まだ十分に分析されていない用法がある。主な問題点は次の二つに絞ることができる。

一つ目は、「状態」の「テイル」であるが、従来の研究では、「単なる状態」と「結果残存」のように二つに分かれているが、実はこの二種とも「状態」に分類すべきだと考えている。また、この「結果残存」の「状態」は「瞬間動詞＋テイル」という形で説明がなされてきたが、「咲いている」の「咲く」や「痩せている」の「痩せる」など、また「行っている」の「行く」、「来ている」の「来る」などの到底「瞬間動詞」とは思えない動詞も存在する。これらの表現は「状態」を表しているため、こぅした動詞を「瞬間動詞」だと言われても、学習者は混乱するばかりである。この問題を解決するには、「テイル」の「状態」の用法の特徴を明らかにし、どのような動詞に「テイル」をつけると「状態」となるのか、より妥当な動詞の分類をする必要がある。

二つ目は、今までの先行研究で、いわゆる「経験」と分類されてきた用法である。この用法に関しては、「経験」、「記録」、「過去の事実を回想」、「現在有効な過去の運動の実現」、「パーフェクト性」、「効力持続」・・・といった解釈がなされてきたが、これもまだ説明しきれない部分がある。この問題について、本書では自分なりの見解を提示したいと思う。

なお、「テイル」の用法は多岐にわたるが、それを全体的に整理した研究は、管見ではあるが、まだ存在していないはずである。本書では、この「テイル」

の全用法を整理すると共に、先程述べた未解決の問題を明らかにし、言語教育上の一助とすることを目指している。

2. 本書の研究目的と研究方法

先行研究に基づき、「テイル」の用法を整理し、新たな分類を構築する。更に、それらに関する用例を、文献資料や、教科書、コーパス、新聞記事、ドラマ等から収集し、分析を行う。更に、第5章の分析に当たっては、梅棹の情報理論を基に、従来行われてきた短文だけの分析ではなく、文脈のわかる文章例を用い、談話分析の手法を使って考察を行っていく。

3. 本書の構成

本書は、序論と結論のほかに、四つの章で構成されている。

第1章では、主にこれまでの「テイル」に関する研究や分類を考察しながら、まとめる。

1.1では、「テイル」の意味と用法について、金田一春彦をはじめ、現在に至るまでの藤井正、高橋太郎、吉川武時、寺村秀夫、工藤真由美、庵功雄、江田すみれなどの研究者によって、どのように研究が行われてきたかについて見ていく。

1.2では、これまで、「テイル」が各研究者によって、どのように分類されてきたかを簡潔にまとめる。

第2章では、「テイル」の用法に関する分類をまとめる。この章は主に2つの部分に分かれ、2.1の個々の用法のまとめでは、第2章の個々の用法に関する先行研究の結果をまとめる。2.2～2.6では、「テイル」の個々の用法について、先行研究に基づき、自分なりの見解を提示する。

第3章では、まだ多くの問題が残されている「状態」に関する「テイル」の用法に関して、詳しく分析を行う。まず、3.1では、先行研究で述べられてきた「単純状態」と「結果残存」について分析する。3.2は3.1の結果に基づき、「単純状態」の用法について分析を行う。3.3では、「結果の残存」について従来の説に基づき、分析を行う。更に、従来の説では、説明のできない「咲く（咲いている）」、「痩せる（痩せている）」、「疲れる（疲れている）」、「曇る（曇っている）」のような動詞と、「行く（行っている）」、「来る（来ている）」のような

移動を表す動詞について分析し、新たな「結果残存」の「状態」を表す動詞の分類を提示する。

第4章では、「テイル」の新たな第5の用法——立証のための情報提示について論じていく。 4.1 では、従来問題にされてきたいわゆる「経験」の用法について論じる。この「経験」という用法については、現在、「経験」、「記録」、「過去の事実を回想」、「現在有効な過去の運動の実現」、「パーフェクト性」、「効力持続」…といった様々な解釈がなされている。これについて、「経験」などと主張している藤井正、高橋太郎、吉川武時、また「効力持続」などと主張している工藤真由美、庵功雄、江田すみれの説を分析していく。

こうした先行研究の結果を踏まえ、梅棹の情報理論を基に、従来行われてきた短文だけの分析ではなく、文脈のわかる文章例を用い、談話分析の手法を使って考察を行う。その結果から、新たな用法を提示する。

また、この結果を踏まえ、引用の「テイル」について、分析、考察を行う。

最後に、この章で明らかになった結果について、図式化を行う。

そして、結論の章においては、第2章から第5章までで明らかになった「テイル」の様々な用法に関する考察の結果をまとめ、「テイル」の用法の全体を概観できるようにする。更に、今回の研究において、十分に行えなかった問題について、将来の課題として提示する。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第1章　先行研究

これまで、「テイル」に関する研究は数多く行われてきた。本章においては、その中から、主な研究を見ていくこととする。なお、「テイル」に関する表記は、研究者によって異なっており、「動詞＋ている」、「シテイル」、「ーている」、「ている」、「テイル」形など様々である。本書においては、原則として引用部分では原文のままで表記し、基本的には「テイル」を用いる。表記が時に統一されていないように見えるかもしれないが、先にお断りしておく。

1.1 「テイル」に関する研究の発端とその後の流れ

「テイル」に関する研究は、かつては、「～シ」、「テ」、「イル」とバラバラに分けられて説明されており、一つの形態素としては捉えられていなかった時代がある。そのため、アスペクトの概念も生じにくかった。また、「テイル」のような日常頻繁に用いられる基本的なものは、日本人にとっては当たり前のもので、研究の対象として捉えられることはなかった。これを一つの構文として研究を始め、アスペクトという概念から「テイル」を説いたのが金田一春彦である。

現在につながる「テイル」の用法に関する研究は、金田一春彦の「日本語動詞のテンスとアスペクト」(1955) に始まる。

「日本語動詞のテンスとアスペクト」では、金田一はアスペクトを二つに分けている。一つは「状態相のアスペクト」で、もう一つは「動作相のアスペクト」である。このうち、「テイル」に関するものは「状態相のアスペクト」である。

「状態相のアスペクト」について、金田一は「状態相のアスペクトには基本的なものとして四つのものがある」と述べ、それぞれ「既然態」、「進行態」、「将然態」、「単純状態態」に分けている。このうち、「テイル」に関するものは「既然態」と「進行態」の二つである。

「既然態」は「以前起った動作・作用の結果がまだ存続している」という状態を表わしている。

「進行態」については、「動作・作用がそれ以前から始まっており,その時も継続中であり,更にそれが後にまで持ち越されるべきことを表わす」と述べている。

また、「進行態」には「反復進行態」というものがあり、これは「ある動作・作用がくり返し行われていることを表わすもの」と述べている。

この金田一の研究は、現在に至るまでの藤井正（1966)、高橋太郎（1969)、吉川武時（1976)、寺村秀夫（1984)、工藤真由美（1982、1995)、庵功雄（2001、2003、2010)、江田すみれ（2011、2013）などの日本語におけるアスペクト研究の第一歩を踏み出したもので、画期的な業績と言えるが、多くの問題点を含んでいた。

金田一春彦

日本語の「テイル」のテンス・アスペクトに関する研究は、金田一春彦（1950、1955）から始まる。ここでは、金田一の二本の研究を取り上げ、論じていきたい。

1）金田一春彦（1950）「国語動詞の一分類」

「テイル」のテンスとアスペクトの研究は一般的に金田一の「日本語動詞のテンスとアスペクト」（1955）から始まると考えられているが、それに先立つ研究として、同じ金田一の「国語動詞の一分類」（1950）が存在する。この論文は国語動詞の分類に関する研究であり、従来の分類法では金田一が述べるように「自動詞と他動詞とに分ける方法」、「意志動詞と非意志動詞とに分ける方法」、「独立動詞と補助動詞とに分ける方法」、「完全動詞と不完全動詞とに分ける方法」などによって行われて来たが、金田一はこの論文によって、「時間的に見た動作・作用の種類による分類」、即ち「アスペクトの観点から観た国語動詞の分類」というものを提唱した。この研究が「日本語動詞のテンスとアスペクト」(1955)に先立つ日本語動詞におけるテンスとアスペクトの研究の嚆矢となるものである。

金田一は、この論文において動詞を四つの類型に分けている。第一の分類は「状態動詞」で、「動作・作用を表わす」というよりも、寧ろ「状態を表わす」ものであるとしている。この動詞は「時間を超越した観念を表わす動詞」とし

て、「テイル」をつけずに用いることができる動詞であり、実例としては「ある」、「出来る（可能を表わす）」、「切れる」、「話せる」、「見える」などである。

第二の分類は「継続動詞」であり、「動作・作用を表わす動詞」で、「ある時間内続いて行われるような種類のものであるような動詞である」としている。具体的には「読む」、「書く」、「笑う」、「泣く」などである。

第三の分類は「瞬間動詞」であり、「その動作・作用は瞬間に終ってしまう動作・作用である動詞」と述べている。その具体例としては「死ぬ」、「点く」、「消える」、「触る」、「届く」、「離れる」などである。

第四の分類は「第四種の動詞」であり、「ある状態を帯びることを表す動詞」で、常に「テイル」の形で状態を表すのに用いられるものだと述べている。その具体例としては「聳える」、「すぐれる」、「おもだつ」、「ずばぬける」、「ありふれる」などである。

金田一はこの研究で国語動詞を「テイル」の形に結び付け、動詞の種類と「テイル」との用法の深い関係を示した。この研究は動詞の分類であるが、同時に「テイル」の用法の分類とも深く関連しているという点で意義がある。

また、金田一は国語動詞について「いつもたった一類だけにおさまっているわけではない」とも指摘している。例として「読む」を挙げ、分析を以下のように行っている。

> 例えば、「読む」は継続動詞の一例として挙げたが，「あの人の本の読み方の早いのには驚いた，今読み初めたと思ったらもう読んでいる」の場合の，「読む」は「読み終わる」の意で瞬間動詞として用いたものである。「この子は相当難しい本でも読む」と言う場合は，「読む」を「この子」の属性と考えたもので「読む」は状態動詞として用いたものだと思う。
>
> （「国語動詞の一分類」『日本語動詞のアスペクト』pp11ーpp12）

つまり、金田一は「もう読んでいる」の完了、結果の継続を表す機能は「読む」という動詞にあると指摘しているが、こちらの用法は動詞の意味にあるというより、まさに「テイル」にあると言ったほうが適切ではないかと思う。こちらの「テイル」の問題は後の章で分析を行うこととする。ここで言いたいことは無論、「テイル」を研究するには、動詞の分類は重要であるが、金田一（1950）の分類は本人も言う通り、創案であり、その後の研究者から様々な異論も出ている。ただ、この分類が「テイル」を研究する初期段階において、その後の研

究に良いヒントを与えることになったのは言うまでもない。

2）金田一春彦（1955）「日本語動詞のテンスとアスペクト」

Ⅰ　テンス

「国語動詞の一分類」（1950）に続き、「日本語動詞のテンスとアスペクト」（1955）において金田一は、それまでの研究は「アスペクトという体系を構成する一つ一つの態の関係がまだはっきりしていない」とし、「アスペクトの態の種類」と「それら相互の関係」について論じ、「テンスおよびアスペクトの態と言われているものを整理・分類」している。そして、各態について「日本語の動詞はどのような表現法をもっているか」について考察している。

この研究では、アスペクトに関する内容を検討するに先立ち、金田一はまず「アスペクトと密接な関係をもっている『テンス』」について論じている。そして、日本語のテンスの定義について、以下のようにまとめている。

> ある現象が，話し手がそれについて話しているよりも，時間的に前の事柄であるか，あとの事柄であるか，（或いはちょうど話の行われている時に起っている事柄であるか）を，言葉の上にしめすしるしである。
>
> （「日本語動詞のテンスとアスペクト」『日本語動詞のアスペクト』p30）

この定義に従い、金田一は「た」について、同じテンスの中でも、「過去」と「完了」を表わすものは違う種類のものであると指摘し、過去の意味を表わすものを「状態相のテンス」と名付けた。つまり、「た」が「状態動詞や形容詞につく場合は，過去の助動詞」であるとしている[1]。

その次の節において、金田一は「来年受けてだめだった時は，来来年[2]受けるさ」のような「た」の使い方について、「過去を表わすものではなくて，以前を表わす」という、より進んだ考えを示した。そして、「た」の用法について以下のように述べている。

---

[1] 金田一は「きょうはぼくの誕生日だった」の用法に関しては、「た」は「時に『想起』を表わす場合がある」と指摘している。これは「いつも終止法として用いられる」ことから、「た」の特殊用法であると述べている。

[2] 「来来年」は原文のまま。

「た」は状態動詞や形容詞につく場合,二種類の意味をもつことができる。(甲)話の行われている時よりも以前,すなわち過去であることを示す場合,と,(乙)次に述べられる事実よりも以前であることを示す場合,とである。
(「日本語動詞のテンスとアスペクト」『日本語動詞のアスペクト』pp33ー34)

そして、三上章の「境遇性のある語」[1]という名称を借りて、甲種の過去態は「境遇性」を持ち、「代名詞」的であるのに対し、乙種の過去態は「境遇性」を持たず、より「一般名詞」的であると述べている。

また、「雪が降った」の「ーた」のような用法は「ある動作なり作用なりが,すでに実現ずみだ」という事態を表わす形であり、「完了態」と名付けた。金田一は「完了態」と上記の「過去態」の違いについて、「た」が「状態を表わす動詞や形容詞などについた場合」は「過去態」であり、「動作・作用を表わす動詞についた場合」は「完了態[2]」であると指摘している。また、「この完了態およびそれと同類のもの」を「動作相のテンス」と名付けた。

ところが、金田一は「書く」といったような動詞を「継続的な動作を表わす動詞である」とし、「た」の形をつけて「書いた」という時は、「書く」の「『継続的』という意味を無視して用いている」と指摘している。そして、「あの人はたくさんの小説を書いている」という用例を挙げ、この時の「書く」は「継続動詞としての意味を無視して使っているようなもの」、つまり「このような場合『書く』は臨時に瞬間動詞として用いられている」と説明している。

この「書いている」に関しては、その後、反論も出ている。例えば、これについて藤井(1966)は、この「書いている」は「過去において行われた動作・作用そのものが問題であって,それを現在から眺めた場合に用いるもの」という反論を出し、この「テイル」の用法を「経験」としている。詳しくはあとに述べるため、ここでは触れるだけにとどめることとする。

---

[1] 三上章『現代語法序説』において、「話し手との関係がその語の意義の一部となっているような単語」のことを指す。「すなわち,一切の代名詞,名詞のうち『今年』『来年』『きのう』『きょう』の類,動詞のうちの『来る』『行く』『やる』『くれる』などはいずれも境遇性のある語である」。

[2] 「過去態」と同様に、「動作動詞」に「た」の形をつけると、「いつも完了態を表わすとは限らない」と金田一は述べている。例として、「よし,買った!」の「買った」を挙げ、これは「『買う』ということに決定した」という意であると説明している。

Ⅱ　アスペクト

アスペクトについて、金田一は大きく「状態相のアスペクト」と「動作相のアスペクト」の二つに分けている。「状態相のアスペクト」とは、「雪が積っている」の「テイル」のような「何かがある状態にあることを表わす」ということに対し、「動作相のアスペクト」とは、「(雪が) 消えてしまう」の「てしまう」のような「一種の『動作・作用』が行われることを表わす」と述べている。そして、「状態相のアスペクトが『―ある』の形に換言できるのに対して,動作相アスペクトは『―する』の形に換言できるものである」と主張している。

「状態相のアスペクト」

また、「状態相のアスペクトには基本的なものとして四つのものがある」とし、それぞれ「既然態」、「進行態」[1]、「将然態」、「単純状態態」であるとした。これらはちょうどテンスの「過去態」、「現在態」、「未来態」、「超時態」に対応するものであるとも述べている。

金田一は「既然態」について、「以前起った動作・作用の結果がまだ存続している」という状態を表わし、テンスの中の「過去態に対応する」と述べている。用例の「雪が積っている」は、まさにこの用法である。また、「既然態」には「非過去態の既然態」と「過去態の既然態」とがあり、「積っている」は「非過去の既然態」に属し、「積っていた」は「過去態の既然態」に属していると指摘している。

「進行態」は「動作・作用がそれ以前から始まっており,その時も継続中であり,更にそれが後にまで持ち越されるべきことを表わす」ものであり、テンスの中の「現在態[2]に対応するものである」と述べている。また、「進行態」には「過去の進行態」と「非過去の進行態」とがあり、「読んでいた」は「過去の進行態」であり、「読んでいる」は「非過去の進行態」である。「進行態」をとり得る動詞は「継続動詞に限る」としている。

更に、「進行態」には「反復進行態」[3]というものがあり、これは「ある動作・

---

[1] 「既然態」と「将然態」という名称は松下大三郎『標準日本文法』によるものである。

[2] 金田一はこの「現在態」について、「日本語においては,テンスにおける現在態は存在しないが,状態相アスペクトにおいてそれに対応する態,進行態は立派に存在する」としている。

[3] 金田一 (1955) に川上シン氏の説とある。

作用がくり返し行われていることを表わすもの」であり、「この頃栄養失調で人がどんどん死んでいる」のように、瞬間動詞でもこの態が作られると述べており、「その瞬間動詞がくり返しという現象を表わすために用いられた結果,継続動詞化して用いられたもの」であると主張している。

さらに、金田一は「将然態」は「ある動作・作用がまだ起らないが起る前の状態にある」ということを指し、テンスの「未来態に対応する」と述べている。これは「既然態」と「進行態」それぞれ「過去態」と「非過去態」があると同様に、「将然態」にも「過去の将然態」と「非過去の将然態」とがある。「二時を打とうとしていた」は「過去態の将然態」に属し、「二時を打とうとしている」は「非過去の将然態」に属すると述べている。そして、「将然態」は「瞬間動詞」或いは「瞬間動詞的に用いられた継続動詞」に限って作り得ると主張している。

最後に、「単純状態態」については、「動作・作用の起りに全く無関係であること」が特徴であり、「形容詞的な意味を表わしている」ということで「現象の起り終りということを考えずに,ある状態にあることを表わす形」とし、これは「テンス」の中の「超時態に対応する」と述べている。そして、「単純状態態」にも、「過去態」と「非過去態」とがあり、「ある」、「白い」、「似ている」は「非過去態の単純状態態」であり、「あった」、「白かった」、「似ていた」は「過去態の単純状態態」であると主張している。

「動作相のアスペクト」

金田一は「動作相のアスペクト」について「終結態[1]」、「既現態」、「始動態」、「将現態」、「単純動作態」、「継続態」の六つの下位分類を行っている。

金田一は「—てしまう」の形を例にして「終結態」と「既現態」について分析を行っている。「終結態」は「読んでしまう」、「書いてしまう」のように「継続動詞に現れ」、「ある動作・作用が完全に行われる」、即ち「完了する」という意味であるとしている。これに対して、「既現態」は「瞬間動詞に現れ」、「その動作・作用がかりそめでなく本当に行われる」、つまり、「本当に実現する」という意味を持ち、「もとに返る望みはない」や「残念だ」というような意味が宿ることが多いと述べている。「終結態」と「既現態」には、「完了態と不完了態」、「既然態と将然態」とがあり、金田一は以下のように例を挙げ、まとめている。

---

[1] 宮田幸一『日本語文法の輪廓』により提唱された名称である。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com